

## 今治歴史散歩

大成経凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第35回は、江戸時代初期に伊予国府中（現、今治平野周辺）の海岸に築城された「拝志城」とその城下町の名残を歴史散歩したいと思います。

### 第35回 幻の拝志城と拝志の町並み

#### ●関ヶ原の戦い後の伊予府中

1600年に起きた「天下分け目」の関ヶ原の戦いは、東西どちらの陣営についたかで大名たちの命運が決まりました。伊予府中を中心に7万石を領した国分山城主の小川祐忠は、小早川秀秋が陣取る松尾山麓で西軍として戦況を見守っていました。途中から東軍へ寝返るも、徳川家康の論功行賞で改易の処分となります。

当時の今治は、過去に伊予の国府が置かれたことで、府中という呼称が一般的でした。関ヶ原の戦い後、伊予国は東軍に属した板島（宇和島）城主・藤堂高虎と松前城主・加藤嘉明とが等しく半国ずつを分け合うこととなります。そのため、府中平野には両氏の所領が混在することになり、国分山城も折半されて廃城となりました。

そこで高虎は、来島海峡をにらむ沿岸に新たな城を築くことになり、養子の藤堂高吉を城代にすえます。嘉明もこれを牽制すべく拝志郷の浜に城を築き、弟の加藤忠明を城代としました。これが今治城と拝志城になります。しかし、高虎が今治を本拠とするのは、1608年夏に伊勢・伊賀へ転封となる直前の同年春のことで、今治城の整備は漸次進められていったようです。転封前の伊予で高虎が正月を過ごした場所は板島

が最も多く、江戸や大坂でも迎えていて、家康の意向を汲んで天下普請の城づくりに励んでいたようです。一方の嘉明は、道後平野で松山城の築城に励むこととなります。



拝志城下町の旧街路（今治拝志郵便局付近）



拝志城跡にある西方寺（今治市東村1丁目）



拝志騒動ゆかりの衣干山（今治市衣干町／衣干八幡大神社）

## ● 拝志城築城と拝志騒動

拝志城が築かれたのは、現在のワールドプラザがある場所（旧田窪工業所）で、小字として「城ノ台」という地名が残されています。地籍図などから、160m×100mの長方形で水堀に囲まれた単郭構造の平城だったようです。その城を中心に油町・苅屋町・長町・馬屋町・蔵屋敷などの小字が見られ、海岸線に平行な城下町だったことが現存する街路からも分かります。

その拝志城下で、1604年に今治領の藤堂家家臣が加藤家家臣に殺傷されるという事件が起

きます。知らせを受けた高吉は憤り、その報復として領界（竜登川）そばの衣干山まで軍勢を進めたようです。最終的に軍事衝突は回避され、幕府に裁可を仰いだところ、加藤家の非が認められました。城代の忠明は剃髪して京都嵯峨東福寺へ出家し、首謀者は切腹となりました。

この一件を「拝志騒動」といい、2つの大名が同居する府中平野の緊張感が読み取れます。一方、幕府からお咎めのなかった高吉に対して、高虎は宇和郡野村（現、西予市野村町）での蟄居を言い渡し、喧嘩両成敗としました。後継者候補だった高吉でしたが、1601年に高虎に実子・高次が誕生すると2万石を有する重臣待遇へと変わりました。高虎の転封後は、今治城主（城代）として府中の2万石を治めました。

## ● 堀部主膳と拝志城の破却

加藤忠明が去った後、城代となったのが堀部主膳でした。主膳は城下の繁栄を願い、領民に対してケンド（篩のこと）の生産を奨励したとされます。善政の影響か、拝志城跡に建立された西方寺にはその供養塔があり、旧城下の美保神社そばには主膳を祀る堀部神社もあります。やがて、1615年の一国一城令によって拝志城は廃止され、町奉行支配の町方扱いとなりました。

一方、松山城完成を目前とした1627年、嘉明は会津（現、福島県）へ転封となります。代わって蒲生忠知が松山藩を治めますが、嗣子なく病没してお家断絶となりました。そして1635年に家康の甥にあたる松平定行が松山15万石、その弟・定房が今治3万石（後、3万5千石）の大名として伊予に入部し、高吉は伊勢名張（現、三重県名張市）へ移封されました。これによって、府中地域の軍事的緊張は解消され、拝志の町は今治領に編入されたのです。

定房は拝志の浜より入国しますが、これは今治港の荒廃を物語っています。その港湾改修に必要な石材は、拝志城跡から調達されることになりました。3年かけて石垣を取り除き、転用されたようです。この結果、拝志は町奉行の支配となり、1694年からは代官支配の在郷町に移管されます。その拝志町の北が喜田村、東が東村（寺河原）という位置関係となり、いつしか城下町の記憶は人々の中から消えていきました。



堀部主膳の供養塔  
（西方寺境内／施主は拝志町）